

## はしがき

1987年に播磨信義が山口大学教育学部から神戸学院大学法学部に移籍してきたとき、播磨には新しい職場での憲法の授業のあり方について明確なコンセプトがあった。それは当時、全国のどここの法学部でも行われていた法解釈中心の授業ではなく、憲法に関する歴史や政治・社会の動きと憲法との関わりを伝えることに重点を置く授業が必要であるという認識であった。今日、専門科目を受講する前段階の導入教育の必要性は多くの大学において共通認識となりつつあるが、播磨は、すでに40年近く前に、自らの教育実践を通じてそうした認識に達していた。

播磨が、新しい憲法科目の教科書のモデルとしたのは、当時一世を風靡していた情報誌『ぴあ』であった。播磨は、各ページの端に細かな字で書き込まれた「はみ出し情報」が人々の関心を集める点に注目した。本文だけでなく、周りに配置された資料も読ませるといふ本書のスタイルは、ここから出発した。

本書が『どうなっている!? 日本国憲法』初版(1990年)から版を重ね、4半世紀以上にわたって数多くの大学で採用されてきたのは、播磨の見通しの正確さを証明している。

2015年の安全保障関連法成立によって日本国憲法の平和主義の基礎は大きく掘り崩された。このように日本の国と社会のありようが大きく変化した以上、「憲法と社会を考える」という副題をもつ本書は改訂されなければならなかった。改訂にあたって、播磨の担当部分も含め全面的にその内容を見直したが、憲法に関する歴史、国や社会の動き、そして憲法に関わる市民の動きを伝えるという播磨の問題意識は貫いたつもりである。そして、各執筆者は各項目の資料の選定についても気を配り、できるかぎり本文の記述とそれぞれの資料とを有機的に関連づけるように努めた。それぞれの資料の意味づけについて考えてもらうことで、憲法の様々な問題についての理解や関心を深めることができると信じている。

法律文化社の秋山泰さんには、本書の初版以来、執筆者からの無理難題に応じて資料のレイアウトなどを工夫していただき、ずっと苦勞をかけてきた。秋山さんはこのほど法律文化社を退職されるが、その後任の野田三納さんは秋山さん以上の丁寧な仕事ぶりで本書を見事に仕上げてくださいました。記してお二人に感謝したい。

本書を故播磨信義に捧げる。

2016年3月

編著者一同